授業科目名	薬理学(2300107)		
時間割名	薬理学(52201)		
時間割担当	山本育由		
実施期	後期	単位数	2　必修
曜日・時限	金・2		

■授業の目標・概要

まず薬物に関する一般的知識（薬物の基本的性質、薬物の作用機序、薬物の吸収・代謝・排泄、薬効とその影響因子、アレルギー、依存、副作用等の薬物治療の注意点と問題点など）について学習する。その後、基本的な疾病の理解と薬物の働き方を学び、同時にその薬物の注意点や問題点などについて理解する。

■学習の到達目標

チーム医療の中心にある患者が、治療に対する理解と納得をしたうえで、治療に能動的に参加できることが重要とされてきています。これが近年行われている、インホームド・コンセントの充実であって、患者の能動的治療への参加が実現してきております。看護に当たる立場の看護師は、このインホームド・コンセントの一翼を担う必要があります。そのためには、医療に対する知識を高め、薬物治療の目的を把握し、それを患者に分かりやすく説明でき、理解を得られるような役割を果たせられるようになることが学習の到達目標です。

■授業方法・形式

テキストを中心に授業を進行し、重要な部分についてはスライドを交えながら理解を深められるようにしていきます。要所要所で小テストをし、成績評価につながる中間テストをします。単に薬物の名前の暗記で終わることがないように、医療現場で即役立つように理解を深めていきます。どうしてこの薬は効くのか、どれくらい効果が持続するのか、どこに作用するのか、副作用としてどのようなものがあるのか、患者にどのような注意をしてもらえば良いのか等を学習していきます。

■授業計画

■授業計画（１）

第１回　第1部　薬理学総論
　　A　薬物治療の目ざすもの　B　薬はどのように作用するのか
第２回　　C　薬はどのように体内をめぐっていくのか　D　薬効に影響する因子
第３回　　E　薬物の有害作用はなぜ起こるのか　F　薬の管理と新薬の誕生
第４回　第2部　薬理学各論
　　第1章　抗感染症薬
　　A　感染症治療に関する基礎事項　B　抗菌薬各論など
第５回　　第2章　抗がん薬
　　A　がん治療に関する基礎事項　B　抗がん薬各論
　　第3章　免疫治療薬
　　A　免疫反応のしくみ　B　免疫抑制薬　C　免疫増強薬　D　予防接種薬
第６回　　第4章　抗アレルギー薬・抗炎症薬
　　A　抗ヒスタミン薬・抗炎症薬　B　炎症と抗炎症薬など
　　第5章　末梢での神経活動に作用する薬物
　　A　神経による情報伝達　B　自律神経系と薬の作用
第７回　　C　交感神経作用薬　D　副交感神経作用薬　E　筋弛緩薬・局所麻酔薬
第８回　　第6章　中枢神経系に作用する薬物
　　A　中枢神経系のはたらきと薬物　B　全身麻酔薬　C　催眠薬・抗不安薬
　　D　抗精神病薬　E　抗うつ薬　F　パーキンソン症候群治療薬など
第９回　　第7章　心臓・血管系に作用する薬物
　　A　抗高血圧薬　B　狭心症治療薬　C　うっ血性心不全治療薬など
第10回　　F　脂質異常症治療薬　G　血液に作用する薬物
　　第8章　呼吸器・消化器・生殖器系に作用する薬物
　　A　呼吸器系に作用する薬物
第11回　　B　消化器系に作用する薬物　C　生殖器系に作用する薬物
　　第9章　物質代謝に作用する薬物
　　A　ホルモンおよびホルモン拮抗薬　B　治療薬としてのビタミン
第12回　　第10章　皮膚科用薬・眼科用薬
　　A　皮膚に使用する薬物　B　眼科外用薬
第13回　　第11章　救急の際使用される薬物
　　A　救急蘇生時に用いられる主な薬物　B　救急・急変時の症候に対して用いられる薬物　C　急性中毒に対する薬物治療

■成績評価の基準

■授業計画（２）

第14回　　第12章　漢方薬
　　第13章　消毒薬
第15回　　第14章　付章　輸液・輸血剤
　　A　輸液　B　輸血
　　看護業務に必要な知識　まとめ

■成績評価の基準

平常点として20%（出席15%、授業を聞く態度5%）、中間筆記試験30%、期末筆記試験50%の配点で評価します。中間筆記試験、及び期末筆記試験の合計点が6割取れていない場合は、再試験をします。ただし、欠席が6回以上あった場合は、中間筆記試験、及び期末筆記試験の合計が60%以上あっても原則として単位取得できない場合があります。

■授業時間外の課題

多くの薬が出てきますので、復習をしてカタカナの薬の名前に慣れ親しむことです。

■メッセージ

　看護師は、医師、薬剤師と並び医療の担い手としての重要な役割があります。患者の薬物治療において安全性を確保することに努め、有効な治療がなされるように常々患者を看る必要があります。患者に最も近いところに存在する看護師は、患者の訴える声に傾聴し、声ない時は表情で察知することがとても重要であり、検査データを読み取ることも重要となります。医療に対する知識を高め、薬物治療の目的を把握して、有効且つ安全な医療の推進に尽力されることを期待します

■教材・教科書

系統看護学講座　専門基礎分野　薬理学　疾病の成り立ちと回復の促進③　大鹿英世、吉岡充弘、井関　健　編著（医学書院）

■参考書

NEW薬理学　改訂第6版　田中千賀子、加藤隆一　編（南江堂）